

## 16. 屋台でつなぐ 地域の人・モノ・活動 ネットワーク

プランナーズ・ネットワーク・神戸  
(兵庫県神戸市他)

### I. 活動の背景と目的

我々の活動の主体は「プランナーズネットワーク神戸」というネットワークである。このネットワークは阪神・淡路大震災後の市民活動支援の幾つかのネットワーク活動を契機として、20～30代の建築家、都市計画プランナーなどを中心に結成、活動を継続している。現在は「『まち』とは総合的なものであり、それを対象とした考察／実践は多様な人材によって担われるべきである」との観点から、そのメンバーは多様性を帶び、建築／都市計画外の専門家、非専門家、学生などにより構成されるようになっていている。

さてこの「プランナーズネットワーク神戸」では、震災後の幾つかの活動の中で、地域コミュニティが様々に分断され、地域や人々が活力を失っている現場を様々に体験してきた。それは例えば、商店街での空き店舗の増加～商店街の閉鎖に至るプロセス、民間の文化施設の相互交流の停止、再開発事業地区とその隣接区域間の断絶、住宅における近隣との断絶的再建の状況などであり、とりわけ住宅滅失から復興公営住宅入居に至るプロセスで、その入居者が体験せざるを得なかつた近隣コミュニティのシャッフル（それはほとんど「破壊」といっても良いようなものであった）は極めて重い意味を持つものであつた。また一方、地域の中で行われ始めた新たな試みが、より広い可能性を持つつも、他との交流を得ないまま、発展の機会を逸しているように思える状況にも出会ってきた。

今回の活動の背景には、このような地域コミュニティにおける様々な分断への認識があり、そしてこれらの分断をつくろい、つなげ、育てていくが目的としてあった。そしてより実際的には、メンバー自身が関わる地域において、「屋台」を通じて新たなコミュニティのきっかけづくりと相互交流を行うことが目的であった。

### II. 活動の内容

今回の活動は、大きくは次の4つのイベントの実施／協力にまとめられる。

- ①南芦屋浜災害復興住宅のだんだん畑／春の収穫祭
- ②桜口・備後町3丁目まちづくり協議会／八幡の夜店
- ③南芦屋浜災害復興住宅のだんだん畑／秋の収穫祭
- ④「復興まちづくりセミナー」への協力



参加者が協力して屋台を組み立てる

以下、順に報告する。なお、我々の活動は通称「屋台ネット」と呼んでいるので、以下その記述に従いたい。

### ①南芦屋浜災害復興住宅のだんだん畑／春の収穫祭



南芦屋浜復興公営住宅で、  
屋台を囲んでの記念撮影

南芦屋浜災害復興住宅は、阪神・淡路大震災後に芦屋市の海岸の埋立造成地に新設された、市営と県営からなる公営住宅群である。多くの居住者にとって、入居に至るまでに幾つかのコミュニティ支援プログラムもあったものの、震災による住宅滅失→避難所→仮設住宅をへて、既存の近隣コミュニティがシャッフルされ続けた果ての居住地の選定結果であり、当然ながら単身高齢者が多く、コミュニティづくりの困難が想定される住宅団地であると言える。この団地計画において、竣工時にコミュニティ＆アート計画が実践され、その一環として「だんだん畑」がアーティストの橋本敏子氏によって提案、実現している。つまり新しい居住者によって、このだんだん畑が耕され収穫され、地域のコミュニティを生み出すことが企図されていた。屋台ネットの最初の舞台はこの「だんだん畑」であった。

構成メンバーのひとり、吉川健一郎が当初からこのコミュニティ支援に関わり、継続的にボランタリーに協力していたことから計画がスタートした。毎年の最初のイベントである「春の収穫祭」への参加／協力であった。つまりその年の第1回目の収穫にあわせて「祭り」を開かれるが、そこへ「屋台」を出店し、参加者が飲み、食べ、憩う場所を提供することになった。我々としては、コーヒー、ビール、ワインなどの飲み物を用意し、適正価格で販売、また同時に、ポラロイドカメラによる撮影／掲示ワークショップも合わせて実行した。

これまでの「収穫祭」は、収穫と簡単な打ち上げで終わったそうであるが、この「屋台ネット」の参加により、異なった状況が生まれた。つまり屋台を中心に、人々の集いの場が生まれ、収穫後何時間もその場所が保たれ続ける。語らいの場が幾つも生まれる。子供が周囲で遊び続ける。さらに驚いたことにメンバーの一人、稻垣暁が沖縄民謡の楽器である三線を弾きはじめると、踊り出す人が現われ、さらにそれは大きな輪になって広がっていった。(後の聞き取りにより、この住宅には沖縄、奄美、沖永良部などからの移住者も多いことが分かったが、踊っていたのは決してその方々だけではなかった。)

このように「屋台ネット」の最初の活動は大きな成果を納めたと考える。少なくとも、そこに新しい場を生み出すことになり、「またやってな」と地元から依頼され、さらに(これが重要な点であるが)「屋台やったらワシ作れるで」という方が住民にあらわれ、自力による屋台建設にまでつながることになった。「屋台」の効果を充分に感じることのできる機会でもあった。

なおこの時に用いた屋台は、前述のコミュニティ＆アート計画を担当された小山田徹氏が作成され、コミュニティカフェと



「八幡の夜店」で屋台ネットの出店



「八幡の夜店」の風景  
数千人の来訪者があった

して何度か使わっていたものを借用して実施した。

### ②桜口・備後町3丁目まちづくり協議会／八幡の夜店

桜口・備後町3丁目は、道路1本を隔てて再開発事業区域に接する地区である。かつては八幡通商店街として組織され、それなりの賑わいもあったが、震災以前から衰退、商店街は解散されていた。そして震災を経て、隣接する区域には都市計画事業により、善し悪しは別にして、多額の資金と人的支援が投入され新しい街が生まれつつあるが、この地区はほとんど何の援助も得られることができず、個別の自力再建（あるいは再建不能）の結果、従前居住者が現在の人口の半分にも満たない、震災前とは近隣コミュニティの在り方が一変してしまっている。

そんな中で、桜口・備後町3丁目まちづくり協議会のメンバーが、かつて商店街で行われていた「夜店」を復活し、新旧の住民が集い、賑わいを生み出す企画を行った。この協議会を一貫して支援し続けている我々のメンバー田中正人の提案により、この「八幡の夜店」への協力が実現した。

「屋台ネット」では、今回は「懐かし飲み物」と「缶バッジ作成」で協力することになった。つまりかつての「夜店」を思い起こさせるラムネや冷やしあめなどの飲み物を揃え、また昔の写真や、その場で撮影した写真を「缶バッジ」として作成する機会をつくった。また「屋台」は、臨時的にテーブルやパラソルなどを持ち出し、印象的な場となるように設営した。

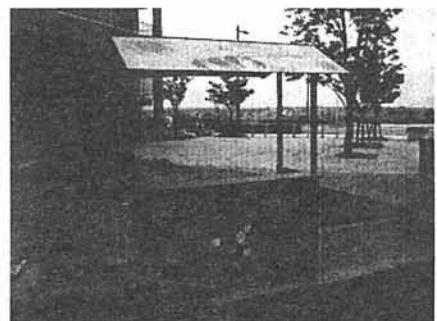
「八幡の夜店」は、結果的に数千人の参加者を集め、予想以上の成功を納めた。夜店に来た人々は、かつての「夜店」を知る従前居住者だけではなく、周辺に新たに引っ越してきたであろう子供連れの若年世帯も数多く見られた。その日は、「夜店」の舞台となった道路が人の憩う「広場」と化し、それは夕方から夜にかけての開催時間中は、ほとんど変化することがなかった。「屋台ネット」としては、地元からの参入が少なかった飲食関係およびイベント関係の屋台の一部として、貢献できたのではないかと考えている。また同時に、企画段階から地元の方々と協議し、例えば部分的なイベント全体のサポート、夜間景観の演出などを手伝いできたことも、一つの成果ではないかと考えられる。

### ③南芦屋浜災害復興住宅のだんだん畑／秋の収穫祭

第1回目の「春の収穫祭」の好評を受けて、実践された活動である。今回の活動のポイントの一つは「地元住民がつくる屋台」であった。既に触れたように、地区住民で大工の経験がある方が「設計図あったらワシつくるで」と仰られたので、「屋台ネット」としては、設計案を幾つか作り提案、相談しながらつくることとした。結果的には、技術的／金銭的課題から、地区住民の方が独自に作成されることになった。（これはこれで良い



「屋台ネット」協力の「八幡の夜店」  
夜景の演出



南芦屋浜での住民手作りの屋台  
彩画は地域の絵画教室の先生と生徒によるもの



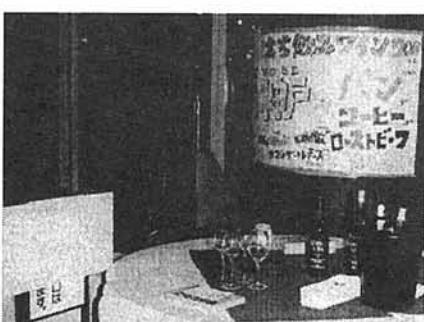
屋台周辺の「収穫祭」の様子



三線の演奏で住民の踊りが始まる  
やがて、大きな輪に・・・



「復興セミナー」での屋台出店  
神戸ブランド食品が様々に集められた



「復興セミナー」の入り口に設けられた、神戸ワインなどの立ち呑みスペース。「立ち呑み」は神戸の居酒屋文化のひとつ

結果だと考えられる。) 作成された屋台には、メンバーの吉川健一郎のコーディネートにより、地元絵画教室の先生と生徒が、彩色を施して下さることになった。また「屋台ネット」では、前回同様幾つかの飲み物と、そして季節を考慮し「おでん」を作成して乗り込むこととなった。

「収穫祭」当日は、朝から作業が開始され昼前には収穫の大半が終わっていた。「屋台」開店と同時に人々が訪れる始める。「収穫祭」に参加された人のみでなく、買物帰りの住民の方の参加も目立った。前回同様、屋台の廻りに人がたむろし、会話や憩いの場が生まれる。住民の方が作られた屋台で、「おでん」と収穫物で作る「大学芋」の販売が行われたが、これが大好評となつた。なかでも驚いたのは、鍋を持って部屋から出てきておでんを買いに来る方が少なからずおられたことである。孤食の課題はあるが、「部屋から近隣へ」出かけるきっかけとなることが可能であることが実感できた。2度目であるが、恒例により三線による演奏と踊りの輪が、今回も広がった。

#### ④ 「復興まちづくりセミナー」への協力

「復興まちづくりセミナー」は、ひょうごまちづくりセンターとこうべまちづくりセンターが震災後毎年共催で実施する企画であり、「復興」をテーマに、神戸市民が参加できるセミナーを行うものである。これまでの実績を踏まえ、この企画・運営に「プランナーズネットワーク神戸」の有志が携わることになり、その一環として「屋台ネット」を実施することとなった。「復興セミナー」としては、「復興の定点観測写真にもとづく鼎談」「神戸のまちを描いた絵画展」「地元ミュージシャンによる演奏」などが行われ、広く「地域文化を紹介し、復興を伝える」ことが趣旨とされた。

「屋台ネット」としては、「神戸の地域食文化」を伝えることをその目的とした。つまり神戸を発祥とする食文化は数多くあり、全国ブランドに成長したものもあるが、むしろ「神戸市民のための地元ブランド」として、決して大規模ではないけれども地域住民の食文化に貢献し、良質な商品を提供しているメーカーを選び、「セミナー」に参加された方に提供することを企画した。具体的には、「神戸銘柄清酒」「神戸銘柄パン」「神戸銘柄珈琲」「神戸商店街コロッケwith神戸地ソース」「神戸牛のローストビーフ」「神戸焼き菓子」などの項目に即して、神戸市内各地から商品を集め、紹介、販売した。

最終的には100名を越える参加者があり、その方々に神戸の食文化の広がりを知っていただけたのではないかと思う。また企画／調査段階で、我々自身がその深さに驚いたという体験もある。実施以前に生まれた各地元メーカーとの接点が、次の活動へのつながる可能性を感じている。

### III. 活動の効果及び今後の課題

各活動の効果に関しては、それぞれに触れた通りである。当初の目論見に違わず、コミュニティ・ツールとしての「屋台」は極めて実効性かつ普遍性に富むものだということが、体験の中から実感として得られている。つまりこの「屋台ネット」の在り方からすれば、どのような状況でも一定以上の効果が期待できることが確認できた。実際に、何度かの実践を続ける中で「ウチでもしてくれ」と要請される機会が数多く出てくるようになった。残念ながら、それらに対して充分な答えは出せていないのだが、少なくとも我々メンバーの間では、この「屋台ネット」の企画段階で生まれた幾つかの手法（「缶バッジ作成」や「食べ較ベイメント」など）が、ごく一般的なものとして流通し始めているのは、附隨した面白い効果だと言える。

今後の課題としては、何よりも「コミュニティ・ツールとしての屋台」の作成にある。これまで何度か設計打合せがあり、図面も何種類か提案されているが、決定的なものが生まれていない。「『屋台』は、場所を生み出す装置であり、それは特定の形を必要としない」という考え方も一方ではあるが、それ以上に、場所や空間に力を与える「かたち」が求められる。これが私たちにとっての、最後の、最大の課題である。